

普曜経の研究（中）

— Lalitavistara における新古の層の区分 —

岡 野 潔

印度学宗教学会 論集 第15号別刷

昭和六十三年

普曜経の研究（中）

— Lalitavistara における新古の層の区分 —

岡野 潔

ノート

この(中)の原稿では、仏本行集経との対応は、とくに重要なものでない限りは、記さないことにした。それらは別のかたちにとまとめて、発表することになった(「仏本行集経の編纂と Lalitavistara」印仏研 37-1 (昭和 63 年 12 月) pp. 430-427)。また Mahāvastu 中の阿舎の借用箇所と、LV の付加増広部分における阿舎の借用箇所とが一致する部分を 9 箇所見出し、先に報告した(「ラリタヴィスタラの部派」宗教研究 279 号(1989 年 3 月))。これら二本の発表要旨は、「普曜経の研究」を別の角度から補うもので、あわせて参照して頂きたい。さて、先の(上)の論文(『論集』第 14 号 1987 年)に対し、幾人かの方々から、論文の意図がよくつかめないと意見を頂いたので、もう一度基本となった考えを説明しておきたい。Lalitavistara の中には普曜経が埋もれている。あたかも、古代都市の発掘において、掘り出された建築群の真下に、古層の建築群がそっくり残っているのと同じように、LV の中にそっくり普曜経、つまり古 LV が残っており、それだけを取り出すことが可能である。そこでまず普曜経の原文を LV から取り出す際に注意すべき、普曜経の翻訳にかかわる特殊な条件があげられた。第一に、paraphrase による訳であるので、文レベルの比較よりも段落レベルの比較を重視すべきこと。第二に、韻文が散文に訳されていることがかなりあり、梵文との対応はその事情を考慮すべきこと。第三に、太子瑞応本起経の借用による翻訳の埋め合わせがあり、それらの箇所はいわばカッコに入れて取り扱わねばならないこと。これらの介在する条件を考慮しながら、普曜経の背後にある原文を LV の内で再発見し、得られた梵文を組み立て、古 LV の姿を再現するわけである。また普曜経から LV への発展には部分的な改変もあり、その際に失われてしまった部分がある。特に LV の後半部は前半部と比べてそのような箇所が多くなる。そのような改変には必ず理由があるはずである。それらの理由は普曜経から LV に至る間に起こった伝承の時代的な変化を忠実に反映していると思われる。改変をもたらしたそれらの変化が明らかにされねばならない。また普曜経の上に LV や方広大莊嚴経が建て増しされたわけであるが、その際いかなる材料を用いて建て増しがなされたのかができるだけ明らかにされねばならない。先に発表した(上)の範囲では(1) 238.14-239.16 (2) 246.8-248.5 (3) 248.6-12 (4) 251.6-252.7 (5) 254.1-256.10 の 5 箇所の Mahāsaccakasutta (にあたる阿舎資料)の借用が付加増広部分にあることがわかった。ひきつづきこの

(中)の論文では(6) 261.2-263.5 (7) 263.6-20 (8) 377.9-21 (9) 378.4-379.14 (10) 379.15-380.9 (11) 395.16-398.17; 399.21-401.20 (12) 403.18-404.13 (13) 405.3-406.15 (14) 416.13-418.21の9箇所において、付加増広部分における阿舎からの忠実な借用が註で指摘される。また Mahāvastu との一致対照は共有する伝資料を知る上で必要であると思われる。以上のような、将来の研究者によってなされねばならない研究のための、ひとつの網羅的な資料をつくることを(上)と(中)の論文は目的としている。(下)の論文では、LVの形成についての私なりの結論をまとめて見たいと思う。

六年勤苦行品第十五 Nairāṅjanāparivarta (18)

原形は[普曜 511c18 にあたる失われた原文], 263.21-264.3, [改変 264.4-270.14 にあたる普曜 511c23-512a29 の失われた原文], 270.15-272.6 であったと推定される。

【対応】 511c19-23=263.21-264.3; 512b1-c5=270.15-272.6

【LV付加】 260.17-263.20^(a) 【LV改変】 264.4-270.14^(b)

【方広付加】 582b20-583a8 (=LV 260.17-263.20)

【方広改変】 583a13-584a6 (=LV 264.4-270.14)

註 (a) マーラが苦行中の菩薩の誘惑を試み、失敗して引き下がる。菩薩は苦行を捨てて、禪定をえらびとる。LVの付加増広における阿舎の借用がここで見られる。261.2-263.5は Suttanipāta 425-449 (Padhānasutta) 及び Mahāvastu 中の阿舎の借用 II, 238.3-240.17 と一致する。また LV 263.6-20 は Mahāsaccakasutta MN. I, 246.20-247.5 及び Mahāvastu 中の阿舎の借用 II, 130.7-18 と一致する。付加増広に用いられた阿舎資料は、パーリ上座部のものよりも Mahāvastu が属する大衆部のものにはるかに近い。サンسكريットへの書き直しを経ている点で LV 中の阿舎は Mahāvastu のものとは隔っているが、基づいた資料が近い系統のものであったことは疑いえない。

(b) 改変付加された内容: 5人の修行者は菩薩が食を摂ろうと決意したのを見て、見放し鹿野苑に去る。苦行中菩薩は十人の村長の娘に食を給されていたが、特に末娘スジャーターは苦行の達成を祈って毎日八百人のバラモンに供養し、自分の捧げた食事を食べて菩薩が最高のさとりに達するよう密かに誓願していた。苦行をやめた菩薩は尸林で布を捨てて身にまとい、乞食のため村に入る。スジャーターは村の神のお告げによって乳がゆをつくり、誓願どおり、菩薩にそれを捧げる。菩薩は河に浴してのち食し、鉢を投げ捨ててさとりの座へ向かう。改変前の普曜のストーリーでは、村長

の娘が嫁入りをする時男子の出産を樹神に祈ったが、祈りが適えられたので、樹の下に坐っている菩薩に乳がゆを捧げる。スジャーターが男子の出産を樹神に祈願するというモチーフは、Nidānakathāにも共通して見られるが、LV・方広ではその伝承を捨てて、彼女の菩薩への誠信を強調するかたちで書きかえたのである。

六年勤苦行品第十五 Bodhimaṇḍagamanaparivarta (19)

原形は[普 512c6-513a1 の失われた原文], 272.8-273.8, 273.16-274.18, 275.17-276.14, 276.19-281.8 であったと推定される。

【対応】 513a1-13=272.8-273.8; 513a13-28=273.16-274.18; 513a28-b14=275.17-276.14 (ただし 散文 513a28-b14=韻文 275.17-276.14); 513b14-514b10=276.19-281.8

【LV付加】 273.9-15^(a); 274.18-275.16^(b); 276.15-18^(c)

【方広付加】 584b27-c6 (=LV 273.9-15); 585a5-28 (=274.18-275.16)

註 (a) 付加部分の内容: 風と雲の天子たちがナイランジャンナー河からさとりの座までの間を淨めて花をふりまいた。あらゆる木々はそちらへ先端を向け、生まれたばかりの子供はそちらへ頭を向けて眠り、山々はそちらへ頭を垂れた。

(b) 付加部分の内容: 菩薩の属性を表わす形容が列挙される。

(c) この偈は普曜にも方広にも欠ける。

迦林龍品第十六 Bodhimaṇḍagamanaparivarta (19)

原形は 281.9-283.11, 284.3-6, 285.17-289.20 であったと推定される。

【対応】 514b12-c10=281.9-283.11 (ただし 散文 514b15-c10=韻文 281.14-283.11); 514c10-12=284.3-6 (ただし 散文 514c10-12=韻文 284.3-6); 514c12-515b5=285.17-289.20 (ただし 散文 514c28-515a12=韻文 287.3-288.10, 散文 515b3-5=韻文 289.19-20)

【LV付加】 283.12-284.2^(a); 284.7-285.16^(b)

【方広付加】 586c20-26 (=LV 283.12-284.2); 586c29-587a19 (=284.7-285.16)

【備考】 1. 方広 588a9-14 (=LV 288.22-289.9) の段落の位置が LV・普曜と異なり、順序を変えて章末にくる。

2. 方広 587a20-b5 は LV 以上に仏本 773a1-23 と合う。

註 (a) カーリカ龍王が菩薩を讃えて唱えた偈に 4 偈が追加された。

(b) さらに 1 偈が追加された。龍王の妃スヴァルナブラバーサ(金光)が次いで現われて 5 つの偈をのべる。

迦林龍品第十六 Bodhimaṇḍavyūhaparivarta (20)

原形は 290.5-299.12 であったと推定される。

【対応】 515b5-516c16=290.5-299.12

【LV付加】 290.1-4^(a)

【方広付加】 588a16-18 (=LV 290.1-4)

註 (a) 付加部分の内容: さとりの座に坐った菩薩の四方を六欲天が守護する。

迦林龍品第十六 Māradharṣaṇaparivarta (21)

原形は 299.15-300.5 であったと推定される。

【対応】 516c17-25=299.15-300.5

【備考】 299.15-18 (=普曜 516c17-19) にあたる部分が方広に欠ける。

召魔品第十七 Māradharṣaṇaparivarta (21)

原形は 300.6-305.3 (ただしマーラの三十二夢の後ろの部分(517b3-10)の夢の項目と順序が普曜と LV では異なる, また途中の 517b19-21 にあたる部分は失われた), [普曜 517c19 の 1 行の失われた原文], 308.15-309.8, 309.14-21, 310.7-12, 310.16-311.9, 311.16-312.8, 312.12-313.14, 314.6-13, 314.21-316.18, [普曜 519a11-12 の失われた原文] であったと推定される。

【対応】 516c27-517c18=300.6-305.3 (ただし散文 517a1-10=韻文 300.13-

301.6, 散文 517b12-19=韻文 302.21-303.10, 散文 517c8-18=主に韻文 304.7-305.3); 517c19-518b27=308.15-314.13; 518b28-519a10=314.21-316.18

【LV付加】 305.4-308.14^(a); 309.9-13 (1 偈)^(b); 310.1-6 (2 偈)^(b); 310.13-15 (1 偈)^(b); 311.10-15 (2 偈)^(b); 312.9-11 (1 偈)^(b); 313.15-314.5 (4 偈)^(b); 314.14-20 (3 偈)^(b); 316.19-319.16^(c) (この中 318.1-319.12 は方広 594c17-595a1 と類似)

【方広付加】 591b21-22 (=LV 309.9-13); 591b29-c3 (=310.1-6); 591c10 (=310.13-15); 591c22-27 (=311.10-15); 592a12-13 (=312.9-11); 592b4-6 (=314.3-5); 592b16-21 (=314.14-20)

【備考】 1. 方広は段落を並べかえている。LV の頁・行で示すと [299.19-303.18], [315.1-316.16], [308.15-314.20] という配置にしている。

2. LV 303.19-305.3 の(原形)部分が方広に欠けているが, ここは普曜のほか仏本行集経にもある。本来あったものが捨てられたのは, 上述の段落の並べかえによるものであろう。

註 (a) 付加部分の内容: マーラの軍の恐ろしい魔物たちの姿を描写をつらねて, 76 種類列挙する。その後で重頌がのべられる。

(b) 付加部分の内容: マーラを中央にして, 菩薩への攻撃の賛成派と反対派が左右に分かれ, かわるがわる偈をのべる。途中に追加された偈がいくつも見られる。

(c) 付加部分の内容: マーラの軍は再三攻撃するが, 魔物にとっての凶悪な武器は菩薩においては美しい飾りに変化してしまう。マーラはただ一度前生で施を行なっただけであるが, 自分は数限りなく行ってきたと菩薩は論じている。マーラは証人がいないと嘲る。菩薩が右手で地面を叩くと, 証人として大地の女神スタヴァラーが地中から出現する。

降魔品第十八 Māradharṣaṇaparivarta (21)

原形は 319.17-320.7^(a), [改変 320.7-321.12 にあたる普曜 519b1-14 の失われた原文(方広 592b25-c11 と失われた原文は一致する)], 321.12-16, [太

子瑞応 477b2-12 の借用 (普曜 519b20-c2) によって捨てられた原文 (方広 593a9-18 と失われた原文は一致する)], 330.9-336.15, [普曜 520c27-29 の失われた原文], 337.7-338.19, [普曜 521a23-27 の失われた原文], [太子 瑞応 477b13-c16 の借用 (普曜 521a27-c11) によって捨てられた原文] であったと推定される。

【対応】 519a18-27=319.17-320.7; 519b15-18=321.12-16; 519c2-520a28=330.9-333.16(ただし散文 519c22-520a9=韻文 332.3-18, 散文 520a13-28=韻文 333.1-16); 520b3-c26=333.17-336.15 (ただし散文 520b6-c6=韻文 333.21-335.8, 散文 520c9-26=韻文 335.12-336.15); 520c29-521a23=337.7-338.19 (ただし散文 520c29-521a23=韻文 337.7-338.19)

【LV 改変/付加】 320.7-321.12^(b); 321.17-330.8^(c); 336.16-337.6^(d); 338.20-343.10^(e)

【方広改変/付加】 592c11-20 (LV 321.17-323.14 と類似); 592c21-593a5 (LV 323.15-325.18 と類似); 593a18-26 (仏本 783c21-784a2 と一致); 593a27-b4 (=LV 329.15-330.4); 593b5-594c17 (この中 594b23-c8 の 8 偈は Buddhacarita XIII 58, 61-67 の借用であり, 仏本 788c5-22 と一致。また 594b6-12(散文)は Buddhacarita XIII 38-47 と対応する。cf. 仏本 788a2-15); 594c17-595a1 (LV 318.1-319.12 と類似); 595a2-19

註 (a) マーラの娘たちによる誘惑は LV では成道前と成道後の 2 回ある。後者は普曜にはなく, LV の付加である。成道前の誘惑(320.1-331.19)では 320.1-7 が原形部分であるが, この原形部分にあたる普曜 519a23-27 には 4 人の娘たちの名が記されている(欲妃・悦彼・快観・見従)。しかし LV にはそれらの名がない。これはなぜか。LV は阿含資料に基づき, 成道後の誘惑の段(378.4-379.14)を付加したのだが, ここで阿含の伝承と普曜の伝承が衝突してしまったのである。なぜなら, 阿含から借用した部分には 3 人の娘たちの名(Rati, Arati, Trṣṇā)があったからである。LV は阿含の伝承を尊重し, 成道前の誘惑における 4 女の名を故意に削り, 成道後の誘惑における 3 女の名を残したのである。

(b) 改変部分の内容: マーラの娘たちが現わした三十二種の女の媚態。

(c) 改変部分の内容: マーラの娘たちは菩薩を誘惑しようと偈をもって語りかけ

る。彼女たちに答えて, 愛欲は苦しみのもとであり, 肉体の無常なることを偈によって説く。次いで娘たちと菩薩のやりとりが韻文でわかるが続けられる。娘たちは菩薩を讃歎し父のもとに戻る。マーラは怒り嘆く。

(d) 本来 1 偈(普曜 520c27-29, 散文に訳された)であったものが LV では 3 偈に改変された。本来のかたちは仏本 784b17-20 に残されている。

(e) 付加部分の内容: 魔物たちがいっせいに菩薩めがけて突撃する。菩薩は前世に行なった限りない施の証人の名を呼びながら大地を打つ。マーラの軍は潰滅する。昏倒したマーラに樹神が水をかける。神々が万歳を叫び, 菩薩の威力を見てさとりに向かって発心する。

行道禅思品第十九 Abhisambodhanaparivarta (22)

原形には[521c13-522a8 の失われた原文]^(a), [(1) 太子 瑞応 478a10-b16 の借用(普曜 522a8-b15), (2) 太子 瑞応 478b26-c19 の借用(普曜 522b16-c15), (3) 太子 瑞応 478b16-25 の借用(普曜 522c6-24), (4) 太子 瑞応 478c20-479a4 の借用(普曜 522c24-523a9) によって捨てられた原文?] であったと推定される。

【LV 改変】 343.13-353.8^(b)

【方広改変】 595a21-596b8 (=LV 343.13-353.8)

註 (a) 普曜のオリジナルな部分(521c13-522a8)では四禅→三十七道品→三明をのべる。これだけで完結しており, 彼は蛇足というべきだが, 普曜はわざわざ次に太子 瑞応の訳文をはりつけて, 続けている。五通→八聖道→成道(以上, 先の三十七道品→三明と重複した内容であることに注意)→十力・四無所畏・十八不共佛法。これらの太子 瑞応の借用に対応する原文が普曜にあったとは内容的に考えにくい。普曜は LV に見られるように四禅→三明で終わる伝承に属し, 伝承の別の系列に属する太子 瑞応の十八不共佛法等は普曜の原文になかったと見なすべきであろう。しかし何らかの続く部分が太子 瑞応の借用の代わりに捨てられた可能性がある。

(b) LV はあまりに簡潔すぎる普曜の記述(521c13-522a8)を改変し, 拡大している。四禅→初夜の天眼通→中夜の宿命通→十二縁起順観逆観→四諦→後夜の成道・三明の具足をのべる。次に正覚の後のさまが付加されている。如来は昔の諸仏の如く瑞相を現わす。十方の仏や菩薩や天子たちが, 成道を祝う。重頌が続く。

諸天賀仏成道品第二十 *Abhisambodhanaparivarta* (22)

原形は 353.9-357.15 であったと推定される。

【対応】 523a11-524a13=353.9-357.15 (多少偈の対応が乱れる)^(a)

【備考】 方広には 355.15-356.12 にあたる部分が欠けている。

註 (a) 353.19-357.15 には計 20 の偈があるが、普曜では対応偈が途中 [13] [14ab] [16] [] [14cd] [15] [17] という順序になっている。[] は不明(普曜 523c18-19)。

諸天賀仏成道品第二十 *Samstavaparivarta* (23)

原形は [普曜 524a14 の 1 行の失われた原文], 360.10-361.12, [普曜 524b9-14 の失われた原文], 368.7-369.4, [普曜 524c6-7 の失われた原文], 369.5-6 であったと推定される。

【対応】 524a15-b8=360.10-361.12; 524b15-c5=368.7-369.4

【LV 付加】 357.18-360.9^(a); 361.13-368.2^(b)

【方広付加】 597a13-c4 (=LV 357.18-360.9); 597c23-599a21 (=361.13-368.2)

註 (a) 付加部分の内容: 淨居天・光音天・梵天の天子たちがそれぞれ仏の前で讃歎の偈をとる。

(b) 付加部分の内容: 他化自在天・化樂天・兜率天・夜摩天・三十三天・四大王天の諸天の王たちや虚空の神々がそれぞれ讃歎の偈をとる。

観樹品第二十一 *Trapusabhallikaparivarta* (24)

原形は 369.9-376.22, [普曜 526b7-12 の失われた原文] であったと推定される。

【対応】 524c14-526b7=369.9-376.22 (多少偈の対応が乱れる^(a), また散文 525b28-526b7=韻文 372.17-376.22)

【LV 付加】 377.1-381.2^(b)

【方広付加】 600c26-601c7 (=LV 377.1-381.2)

註 (a) LV 370.11-372.16 の偈に 1 から 25 までの番号を付けて、普曜 525a3-b27 の偈に対応させると、普曜では偈が [1]? [2]-[7] [8]? [10] [11] [] [] [14] -[16] [12] [] [17]-[25] のように並んでおり、空白のカッコ [] は対応偈が見出せない。このあと普曜ではつづく 47 箇の偈が散文に訳されてしまっているが、よく梵本と対応する。

(b) 付加部分 377.1-8 は成道後四七日の坐禅と経行をしるすが、この記述は、何らかの資料に基づいて付加されたと思われる。——付加部分 377.9-21 はマラーが仏を般涅槃に誘う。Mahāparinibbāna-s. 3-34 に「アーナンダよ、私が初めてさとりを開いて間もなくのこと、次のようなことがあった。そのとき、私はウルヴェーラーのネーランジャラー川の岸辺の、アジャパーラニグロダ樹の根本にいたのだが、そこにマラーがやって来て、一隅に立った」と仏陀の回想がのべられる。梵本 Mahāparinirvāṇa-s. 16-5 や漢訳長阿含『遊行経』等にも同じ記述がある。この阿含の記述に基づいて、LV はその文章の以下に続く、マラーの般涅槃への誘いの段をそのまま借用し、成道直後の第四の七日の位置に付加したと思われる。阿含を借用したと見られる LV のこの箇所 (377.9-21) はパーリ本 Mahāparinibbāna-s. と東トルキスタン有部の梵本 Mahāparinirvāṇa-s. 根本有部の Divyāvadāna p. 202, 及び法蔵部の所伝といわれる長阿含『遊行経』と比較して見ることができる。短いパッセージの比較にすぎないが、LV の用いた阿含は比較的パーリのものに近く、有部系や法蔵部の伝承(これら両者は親近性がある)からは隔たっている印象を受ける。LV の付加がなされた部派は有部系や法蔵部から距離が遠く、よりパーリ上座部に近かったかと思われる。——付加部分 378.1-3 は SN. 4 Mārasamyutta 3.4 Sattavassāni の 11 パラグラフに類似する。——付加部分 378.4-379.14 はマラーの 3 人の娘 (Rati, Arati, Trṣṇā) が仏陀を誘惑する段であるが、その材料を阿含からとっていると思われる。パーリ SN. 4 Mārasamyutta 3.5 dhītarō では 3 人の娘の名が Taṇhā・Arati・Rāgā で、多少伝承の異なりを感じさせるが、1・2・12・13・22 パラグラフに LV と共通している偈頌が見られる。これらはすでに E. Windisch が指摘している (Māra und Buddha, Abhandl. d. K. S. Gesellsch. d. Wissensch. XXXVI, pp. 125-129)。漢訳『雜阿含経』1092 経では三女の名が愛欲・愛念・愛樂になっていて、やはり合わないが、パーリの伝承と全体がほぼ一致する。これらの阿含の相当部分と比較して、LV は簡潔に、途中を省略して阿含を借用したことがわかる。また LV では仏陀が娘たちを老婆に化えてしまい、憐れんでまたもとの姿に戻してやるという、新しいモチーフがストーリーの中に入ってくる。この、仏陀が娘たちを老婆に化えるモチーフは、普曜經中の、太子瑞応からの借用部分である 519c1-2 にすでに見られる。——付加部分 379.15-380.9 は成道後第五七日に世尊がムチリンダ龍王の住処で雨天を過ごされたことをのべる。また付加部分 380.10-381.2 は第六七日にムチリンダ龍王の住処とアジャパーラ樹との間で種々の外道たちと出会ったことをのべる。LV が利用した律蔵大品にあたる資

料にはこのような一節があったものと思われる。

商人奉養品第二十二 Trapuṣabhallikaparivarta (24)

原形は [改変 381.3-383.22 にあたる 普曜 526b14-c7 の失われた原文], 384.1-385.7, [太子瑞応 479b9-23 の借用 (普曜 526c28-527a14) によって捨てられた原文], [普曜 527a15-25 の失われた原文], [太子瑞応 479c17-480b1 の借用 (普曜 527a25-c11) によって捨てられた原文] であったと推定される。

【対応】 526c7-27=384.1-385.7

【LV改変/付加】 381.3-383.22^(a); 385.8-392.4^(b) (この中 386.14-391.14 は Mahāvastu III, 305. 16-310.6 と合致)

【方広改変/付加】 601c8-602a29 (=LV 381.3-383.22, ただし散文 602a19-24=韻文 383.12-14); 602b22-c27 (この中 602b22-c19=LV 386.3-387.17, ただし散文 602c8-15=韻文 386.22-387.9)

註 (a) 改変部分の内容: 成道後第七七日に、仏が坐っていたいちじくの樹の近くのなつめやしの林に住む神が、二商人の車を停めて、驚く二人を仏の許に案内する。二人は食をささげようとするが、鉢がないのに気づいた四天王がそれぞれ金・銀・ルリ・水晶・サンゴ・エメラルドの鉢を持ってくる。しかし青衆天の石鉢でなければならぬのに気づき、それを仏に献じる。改変前の普曜のストーリーでは、500人の商人が出てくるが(これはLVでは500の車荷となる)、商人たちを導くのはなつめやしの林の神ではなく、識乾 *sikhin* (or *sikhaṇḍin*?) という前世で彼らの親戚であった梵天である。

(b) 付加部分の内容: 重頌がのべられる。次に仏に二商人がささげる食物の由来がのべられる。二商人が仏の食事を用意している時、牧人が牛の乳を搾てみるとバターが出てきたので、驚いてそれを二商人にもたす。すると前世は *sikhaṇḍin* というバラモンで彼らの親戚であった梵天が出現し、それは仏に献じられるべきであるとのべる。ここでLVは普曜の伝承との統合を図っている。食を供せられた仏は商人たちの繁栄のために諸天の守護を祈る偈をとる。この祈りの偈は Mahāvastu のものに酷似している。

商人奉養品第二十二 Adhyeṣaṇāparivarta (25)

原形は 392.7-393.16 であったと推定される。

【対応】 527c12-528a26=392.7-393.16

【方広付加】 603a22-24

梵天勸助說法品第二十三 Adhyeṣaṇāparivarta (25)

原形は 393.17-395.15, 401.21-402.16 であったと推定される。

【対応】 528a28-c13=393.17-395.15; 528c13-25=401.21-402.16 (ただし散文 528c19-25=韻文 402.9-16, しかし対応する方広 605a25-b1 は(誤って)散文)

【LV付加】 395.16-401.20^(a)

【方広付加】 603c11-605a14 (=LV 395.16-401.20)

註 (a) 普曜では梵天の勸請が一度ですんでいるが、LVはパーリ Mahāvagga や Mahāvastu に見られる如く三たび勸請がなされたことにするために、阿含資料から対応箇所を借用してきて、2・3回目の勸請を付加したものと思われる。付加部分 395.16-398.17 と 399.21-401.20 は Mahāvagga 1. 5. 1-13 及び Mahāvastu 中の阿含の借用箇所 III, 314. 13-319.18 と一致する。特に Mahāvastu の基づいた資料はLVのそれに近かったと思われる。

梵天勸助說法品第二十三 Dharmacakrapravartanaparivarta (26)

原形は 402.19-403.14, [普曜 529a5-10 の失われた原文]^(a), 407.17-408.5, 408.14-409.14, 409.21-410.1, 410.11-13, 411.18-412.18, [普曜 529b19-21 の失われた原文], 414.3-416.12, 419.1-20 であったと推定される。

【対応】 528c25-529a5=402.19-403.14^(b); 529a10-14=407.17-408.5; 529a14-23=408.14-409.14?; 529a23-25=409.21-410.1?; 529a25-27=410.11-13; 529a27-b18=411.18-412.18; 529b21-530a8=414.3-416.12 (ただし散

文 529b21-c14=韻文 414.3-415.8); 530a9-28=419.1-20

【LV付加】 403.14-407.17^(c); 408.5-14^(d); 409.14-20^(e); 410.1-10^(f);
410.13-411.18^(g); 412.19?-414.2^{(h)?}; 416.13-418.22⁽ⁱ⁾

【方広付加】 605b22-606b4 (=LV 403.14-407.17); 606b11-14 (=408.5-14); 606b29-c6 (=409.14-20); 606c9-14 (=410.1-10); 607a7-24 (=412.19-413.18, ただし散文 607a7-10=韻文 412.19-22); 607b13-c26 (=416.13-418.22)

註 (a) LVにおいて削除された普曜のこの箇所は五比丘がかつて父王によって太子を守るために遣わされた者たちであることをしるす。この五人の正体は普曜では前後2回出てくるが(509b13-22, 529a5-8), しかし両箇所ともLVでは削除されている。LVでは王に遣わされた付き人というこの物語性・虚構性の強い伝承は捨てられ、新たに阿舎の材料だけから出来ている伝承を採用している。五人はルドラカ・ラーマプトラの弟子であったとLV 245.16-22は語る。

(b) 先に告車匿被馬品第十三 Bimbisāropasamkramanaparivarta (16) の註(c)でのべた、原形にルドラカ・ラーマプトラの段は出てくるがアーラーダ・カーラーバの段はLVの如くいちいち繰り返されず省かれているという現象がここにおいても再度見られる。

(c) 付加部分の内容: ルドラカ・ラーマプトラの死を知り、アーラーダ・カーラーバを思うが、やはり死を知る。五比丘に法を説くことを決意し、ペナレス鹿野苑にむけて出発する。ガヤーへの途中アージーヴァカ教徒ウバガに会う。ガヤーからガンガー河までの仏の宿泊した地名があげられる。河で船頭に乗船を拒否され、空中を飛んで渡る。ペナレスに入り、托鉢をすませた昼下がりに五人のいる鹿野苑に向かう。付加増広における阿舎の借用がここでも見られる。403.18-404.13, 405.3-406.15はMN. 26 AriyapariyesanasuttaやMahāvaggaに合う。特に405.3-406.15はMahāvastu中の阿舎の借用III, 325.12-327.7と一致する。416.13-418.21はMahāvaggaと合うが、とりわけLéon Feerが発表したHeden将来の梵本転法輪経断片と全く一致する(水野弘元「転法輪経について」仏教研究創刊号(昭和45年12月)p.100)。——付加部分406.18-407.11で宿泊した地名をあげ、ガンガーの岸辺で船頭に会ったことをのべているのは、何らかの未知の資料を用いたと思われる。

(d) 付加部分の内容: 仏の威厳に抵抗しようとする五人のさまを、下から火で焙られた籠中の鳥に譬える。(d)と下の(e)がちょうど字句的にMahāvastuと一致する箇所であることは松田祐子氏によって(「Lalitavistara第26章 Dharmacakrapravartana-parivarta」印仏研35-2 pp.944-943)指摘されている。これらの付加はMahāvastuと共通する資料を用いているのであろう。

(e) 付加部分の内容: 如来が来たれ、比丘よという、五人は自然に比丘の姿となり、法臘百年の如くであった。

(f) 付加部分の内容: 蓮池において沐浴する。どこで過去仏たちは法輪を転ぜられたのかと思慮すると、転法輪の場所たる千の宝座が出現し、仏は四番目の座に坐る。この付加部分がMahāvastuとLVにしか見られない独自のものであることは、上の松田氏の研究に指摘されている。

(g) 付加部分の内容: 世界間の闇を照らす偉大な光明。大地の六種十二相の震動。喜ばしい音が聞こえ、誰もが恐れることがなかった。悪趣の衆生たちもいつか煩いから解放された。これらの clichés の付加は、先の降神処品第四 Pracalaparivarta (5) でも見られた。

(h) 付加部分の内容: 地神が菩提道場を變成し、八万四千の獅子座が欲界・色界の天子たちによりもたらされる。集まった菩薩や天子たちが転法輪を請う。

(i) 普曜 530bに見られる如く、本来の伝承では初転法輪の内容は無常・苦・空・無我と十二因縁だけを偈で説くものであった。ところがLVでは阿舎の転法輪経の伝承、すなわち離二辺中道・八正道・四聖諦・三転十二行相の説法を付加することにより、古い伝承に一般に他の大きな仏伝に見られる伝承をとって代わらせ、それらの偈を背後に押しやってしまったのである。

拘隣等品第二十四 Dharmacakrapravartanaparivarta (26)

原形は 419.21-422.6 であったと推定される。

【対応】 530b1-11=419.21-420.14 (ただし散文 530b1-11 (抄訳)=韻文 419.21-420.4); 530b11-c6=420.15-422.6 (ただし散文 530b11-c6=韻文 420.15-422.6)

【LV付加】 422.7-438.12^(a)

【方広付加】 608b18-611b10 (=LV 422.7-438.12); 611b16-616a17

註 (a) 付加部分の内容: マイトレーヤ菩薩が如来の法輪の性を尋ねる。(マイトレーヤの不意の登場は付加がなされた時代・地域のマイトレーヤ信仰の高まりの反映であろう。所現象品第三 Pracalaparivarta (5) の付加と内的に関連している。) 仏が答え、法輪の性がどこまでも列挙されてゆく。終わりに重頌で説法がまとめられる。

拘隣等品第二十四 Nigamaparivarta (27)

原形は 438.15-439.2 であったと推定される。

【対応】 530c6-14=438.15-439.2^(a)

註 (a) 経の流布・伝持を勧める文 438.18-439.2 に対応する部分が奇妙にも普曜には2つある。つまり ① 530c11-14 (拘隣等品第二十四) と ② 537a1-5 (歎仏品第二十九) であるが、① で古 LV は終わっていた。ところが普曜は後ろにいくつかの品を付け足したためにもう一度同文を繰り返し、それが ② になったわけである。② は LV Nigamaparivarta の初めの文章である。② を拡大して Nigamaparivarta が作られたと考えられる。この LV の最後の品の特殊な形成過程については外園幸一氏の研究がある (『Lalitavistara 囑累品の研究 (2)——その形成過程について——』印仏研 32-1 pp. 477-474)。

巻七で普曜はいったん終わってしまっている。普曜の、LV・方広の原形としての役割はここまでで終わる。ここから先普曜は巻八として十八変品第二十五から囑累品第三十まで6つの品がある。しかしここ巻七の拘隣等品第二十四で普曜は「受持・諷持・奉行し、衆人のために説け」と、経の末尾としての体裁をととのえて、終わっている。この後に続いている諸品は新しく付け加えられた部分である。